

令和2年度桜門体育学会大会報告

大会報告

大会委員長 鈴木 典 (日本大学スポーツ科学部)

令和2年度(第11回)桜門体育学会大会は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、令和3年1月17日から23日の期間において、はじめてのオンライン開催となりました。本大会は特別講演、一般発表(オンデマンド発表:従来のポスター発表, ライブ発表:従来の口頭発表), 総会のプログラムで実施されました。

特別講演は17日から21日まで、本大会特設ページに講演動画を掲載し、大会参加者からオンラインで感想を投稿してもらいました。一般発表も特別講演と同期間、オンデマンド発表はポスター資料のpdfファイルを、ライブ発表は発表資料のpdfファイルと発表動画を特設ページに掲載し、大会参加者に視聴・閲覧してもらいました。質疑応答について、オンデマンド発表は質疑応答用掲示板に投稿されたテキスト形式の質問に対し、23日までにテキスト形式で回答する要領で、ライブ発表はオンラインで実施しました。

特別講演は福田充先生(日本大学危機管理学部教授)に「新型コロナウイルスの危機管理とリスクコミュニケーション」のテーマで令和2年4月の新型コロナウイルス感染拡大に対する政府による緊急事態宣言発出等、正にわが国の危機的状況におけるリスクコミュニケーションの具体策について講演いただきました。オンラインで多くの質問が投稿され、参加者にとってはスポーツの教育、研究、実践場面での感染防

止の徹底を再認識する貴重な機会となりました。

一般発表ではオンライン開催にも関わらず、オンデマンド発表が53演題、ライブ発表が7演題と多くの発表があり、オンデマンド発表は7ブロック、ライブ発表は2ブロックに分けて実施されました。一般発表でも特別講演と同様、多くの質問が投稿され、発表者は研究課題への検討をさらに深める有意義な手掛かりが得られたと思われます。

総会では例年通り、学会の運営に関する事項が庶務・会計、編集、企画・広報、大会実行委員会から報告、審議され、議長により滞りなく進行されました。また、総会では水落文夫会長から一般発表の学会大会賞(計8演題、表1の通り)が発表されました。

本大会はオンライン開催でしたが、149名が参加し、特別講演、一般発表共に多くの反響がありました。特別講演では新型コロナウイルス禍におけるスポーツの教育、研究、実践場面での危機管理の重要性と具体策を学修することができ、実り多き大会になったと思われます。例年と異なる開催方法でしたが会長、理事長、理事、実行委員の先生方、また協賛いただいた企業や団体の皆様には例年と変わらぬご支援をいただきました。さらに、参加者の皆様のご協力にあらためて御礼申し上げ、令和2年度第11回大会報告と致します。

表1 一般発表における学会大会賞発表演題一覧

【ライブ発表】

L1-1	三井梨紗子（日本大学大学院文学研究科教育学専攻） アーティスティックスイミングにおけるエキスパート指導者の技術指導：コーチによる語りとエピソード記述をととした事例的検討
------	---

【オンデマンド発表】

O1-7	馬淵皓大（日本大学商学部会計学科），庄司泰我（日本大学商学部会計学科）， 西川大和（日本大学商学部商業学科），佐藤佑介（日本大学商学部） コロナ禍に立ち向かう—運動習慣がレジリエンスを高める可能性—
O2-7	今関滯（日本大学文理学部体育学科），松本百香（日本大学文理学部体育学科）， 水落文夫（日本大学文理学部） バスケットボールにおける良い流れの発生要因
O3-3	田島勇人（日本大学文理学部体育学科），高橋正則（日本大学文理学部） 大学テニス選手におけるスポーツ外傷・障害の発生と心理的競技能力の関係
O4-1	三島拓也（日本大学商学部商業学科），西川大和（日本大学商学部商業学科），佐藤佑介（日本大学商学部） Does the delay affect the gaze? —画像表示タイミングの遅延が視線行動に与える影響—
O5-4	高階曜衣（日本大学商学部） 長期トレーニングに対する好中球変化
O6-4	岡村 瞳（日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科） クロール泳における高強度領域の主観的努力度の変化が客観的及びストローク動作に与える影響について—長水路を対象として—
O7-6	松山 愛（日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科）， 和田龍起（日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科），本道慎吾（日本大学スポーツ科学部） 水中ドルフィンキックにおけるうねり動作の定量的分析—意識度合いの相違から—

※太字が発表者